場所になり、梅雨の候ともなれば、連日の雨で甚だしく増水し、濁水は堤を破つて兩側の青々とした稻田に溢れ出すのである。

夏になれば金氣のあるこの川は眞赤になり、秋にはもとの清水にかへり、十五夜の月光をこな〳〵に破壞して、兩側にぼつ〳〵生えた蘆の下葉を洗つて流れて行く。冬は一面眞白な中を唯だ一筋黑くうね〳〵と流れて行く。

自分はよくその川のほとりに立つて、さら〳〵と小波をたてゝ流れ去つて行くこの川を見て、無我の境地に入るのである。

山田惠一

故郷！故郷！何んとなつかしみのこもつた言葉だらう。町から離れた片田舍の山麓とはいへ、私の故郷は私にとつて一番親しい所なのだ。前は廣々とした黃金の波打ちよせる田圃後は美しい綠の山、四季とり〴〵の鳥鳴き、花咲き亂れ、實にのんびりとして朗かな所だ。修學旅行に於ても、美しい數多の景色や其の他色々の物を見たけれど、何時も自分の腦裏にこびりついてゐるのは故郷のみだ。昔の英雄豪傑でさへも故郷には涙を宿して見たものだ。まして現時遠く故郷を離れて、異國の土地に活動してゐられる將士の心中や如何ばかりであらう。

故郷は戀しい。親しい所だ。故郷あるが故に立派な詩歌が生れ、名文が出來る事が少くない。それ程、故郷は人々の印象に殘つてゐるものだ。故郷を知らない人々は不幸だ。故郷は人々の心を慰めてくれる。故郷は人々にとつて美しく樂しい純な所なのだ。

十二月の午後

西島輝夫

十二月には珍らしい天氣なので、自分は散步したくなつた眞によい天氣であるが風はさすがに十二月の風であつた。春の樣な軟な、なでる樣な風ではなく何處となく尖つた感じがした。そして空には一刷毛なでた樣な雲が棚引いてゐた。

ふと氣付くと何時の間にか公園についてゐた。此の樣な小さな町では公園より外に行くところがなかつた。公園と云つても名ばかりで、何等見るべきものはなかつた。前に琵琶の

湖を控へ、後ろに櫻と松との單調な色彩を具へてゐるに過ぎなかつた。櫻も春は綺麗だが師走の櫻は餘り派手な物ではなかつた。落葉も最早腐つてじめじめしてゐた。まさか此の樣な處に腰掛けて「武藏野」に書いてある樣に生して四顧して考へた等と云ふ樣な事は、行はうとしても到底出來た業ではなかつた。

此處は日本が產んだ彼の英雄、豊臣秀吉の最初の城主となつて城を構へた土地である。其の後、城は彦根に移されて、彦根城の一部となつた。自分は彦根の城に登る度に、長濱から移された門を見て、どうしても此れを唯の建造物として見る事は出來ない、何んだか或一種の懷かしさが起つて來るのを禁じ得なかつた。

城を建造するには何處にでも一つか二つのそれに伴ふ傳說があるものだ。此處にも一つの傳說がある。公園の北の築山の中央に大きな松の木が、圍ひされてある。物語りは此の松の下に寢つてゐる女から始まる。城を造る棟梁が、此の城が壞れない樣に、女の一念を以つて此の城を護らさうとしたそうだ。然し其の女に一体誰がなるのだ、色々と探した後、郡上片原の某家の娘に其の白羽の矢が立つた。一方其の矢を立てられた家では、兩親を始め娘や親戚の人々迄集まつて、泣き明した事も幾日か。然し月日はそんな事には容赦なく流れ去り、さて生埋とされる其の日が訪れて來た。名譽と云へば此の上ない名譽であつた、然し殘酷であると云へば餘りにも殘酷であつた。然し其の娘は涙を打ち拂ひ、雄々しくも白衣を身に纏ひ、凛然として死出の旅へとつかれたのだそうだ。そこで此の勇ましき、若い城の犧牲者の爲其の靈を慰めんとして、其の生埋めにされた地に松の木を植えたのが、現今の此の松だと云ふことである。

自分は今この五百年前からの傳說を秘めた松の大木の前に佇みて、其の傳說を想起して壯嚴な尊さを感じると同時に一種の凄慘さを感じて暗然とならざるを得なかつた。

いつの間にか夕陽が湖水に寫り、空も湖も、浮かんでゐる水鳥まで眞赤に金色に輝いてゐる。松も夕陽を浴びて眞赤になつてゐる、自分はふと我にかへり思ひ出した樣に家路についた。

銃を持つた時

居長賢藏

ドヤ／＼と數名が入り込んだ——銃器室の内部は何だか氣味惡い程薄暗い、窓からは黄色い日光がさし込んで所々油がにじんでゐる机の一角を反射してゐる。油で洗練せられた焦茶色の銃は律儀にも整頓せられてゐる。この焦茶色が銃を一見した時、僕に或一種の言ひ表せない強味を與へた。

各々は指名せられた通り銃を執つた。その銃を執つた時！何とも言へぬ愉快さが僕を襲つた。手も足も、身も心も躍つて仕樣がない。僕は非常に嬉しかつた——何の理由もなく。本當に、今となつては強ひての理由はあるものゝ、その時は唯心が躍るのみであつた。

心が躍る！　これこそは向上の意氣なのだ、この向上の意氣なくしては、到底滿足な人生は生れぬのだ。心が躍つてこそ眞劍の努力が行はれるのだ。

僕は銃口蓋をはづした。そしてA君を眺めた時、彼も仰々しく銃を持ち上げてゐた。そして僕を眺めた時、二人は何を思つたのかニツコリと微笑した。恐らくは同一心境になつたのだらう。そして彼の眼は希望に輝いて、日頃より黑い彼の眼は尙一層黑く光つてゐた。然し、二人は默々として擧動して居た、それは室内の重々しい空氣と、黄色い日光とが斯くあらしめたのだ。

銃の一部始終を眺めて何一つとして漏れなく手入してあるその上級生の熱心さには敬意を表はさずには居られなかつた

臺灣思出記

上田良平

僕等が去り難い臺灣を去つて彦根に歸つてきたのは、はや今より五年前の昔即ち昭和二年の春の頃であつた。讀者の内で「何故僕等の家族が臺灣のやうな所へ行つたか」と不審に思はれる人もあるだらう。それは僕の父が臺灣總督府の招聘に應じ臺中病院長として奉職したのに他ならなかつた。丁度僕が小學三年の時であつた。思出せば色々のことが綿々として盡きないが、その内今記憶にあるものを述べよう。

一、内地より臺灣へ達するまで

父が突然京大の恩師の命により母と僕と弟の四人で未知の地に旅立ちたのは一月の雪の降る日であつた。巨船は神戸よりまつすぐに小雨けむる基隆へ入港しました。その時には多數の顔知らぬ人達が迎へに來て居て呉れました。それより直ちに臺北を經て臺中にむかひました。

二、僕の家

家は總督府より示された院長官舍であつた。此の家は非常に大きく床の馬鹿に高い家であつた。領臺當時に初めて建つた官舍で醫學の進歩せざる當時にありては、マラリヤの媒介物たる蚊は、地上より三尺高く飛ぶことが出來ないとの說で建つたのださうです。玄關には大きな木が澤山あり、庭園にはボンカン、バナナの樹、木向（モッカ）の林があり、一年に一度秋の月夜の晩に園遊會がありました。

三、小學校

僕等の通學してゐた小學校は、臺中尋常高等小學校でありました。僕の家からは近くにあつた。途中に本島人公學校があつた。臺灣の小學制度は内地人と本島人、即ち土着の臺灣人とは教育の程度、言語、習慣が異るために内地人の學校を小學校とし本島人の學校を公學校と呼んでゐる。公學校は小學校より立派な煉瓦造りであつた。公學校生徒は全部跣足である。

四、風俗、氣候

生蕃人は時々警官につれられてたくさん山中から街へ出てくる。その服裝は實になさけないもので、赤い布や、しまのキレを体にしばつてゐるだけである。これで「ヨソユキ」の姿である。警官の姿も内地とは異つていつも武裝してゐる。熱蕃人は農業、工業に從事してゐる。本島人の老婦人は大部分纏足してゐて召使を二人つれて歩いてゐる。

氣温は非常に高く冬と雖も内地の夏服を着用してをらねばならぬ位である。また雨の少ない所では屋根も壁も皆土で造つた家があつた。勿論雪なんか見たくとも……。

五、臺中での知己

本島人の知己も相當に多かつた中に、特に蔡洗澤といふ人はなつかしく、この人の招待で内地の雪合戰とよく似た石合戰を見に行つた。もう歸るといふ時、船室（キャビン）で泣いてゐた。來年は先生（僕の父）の所へくるとかなんかいつてきてゐる。其の他（もう内地に歸つてゐる人もゐる）は、はつきり覺へてゐない。

六、料理、果實

あちらでは豚肉、豚肉何んでも豚である。内地のソバに似

たものにこれがいれてある何とかいふものはあぶらこくてうまい支那料理の一つである。市場へ行けば豚の皮のひんむいた首がつらなつてゐて實に氣持が悪い。

諸君は臺灣へ行けば何處でもバナナが喰べられてうまいだらう、非常に大きいのがあるだらうと思つてゐるだらうがさうはいかぬ。僕の家にもバナナ園があつた。バナナも大きいうまさうなのは皆出して送つてしまふから内地等とあまり變らない。ポンカン（みかんの一種）は非常に大きくおいしいが内地では一個參拾錢位する。或時或る人の招きでポンカン園へ行つたことがあるが實に今から思ふとなんでもつと喰べておかなかつたかな——と思ふ。

七、交　　通

臺灣で目につくものは臺車といふ内地のトロッコのやうなもの〻發達がいちぢるしいことだらう。臺灣には電車がないからこのやうに發達したのだらう。線路（レール）の上を人間が押すのである。下り坂になると自分等もそれにのる。又單線で兩方から臺車がくると片方（もし片方が貨車で片方が人間ならば人間の方の車をはづす）の臺車は線路をもう一方の方にゆづる。そして停車場があり、切符も賣つてゐる。

八、基隆出帆より歸るまで

一萬噸の大阪商船、ほうらい丸に乘つた。汽船は東支那海の荒浪をけつて進んで行つた。船内は設備よく食堂の大ホールその他の娯樂機關皆いたれりつくせりであつて少しも退屈を感じなかつた。瀬戸内海に入る所の門司港に船が停つた時の景色はいまだにしつかりと覺えてゐる。たくさんの舟、帆舟、小蒸氣、和船、ボートＥＬＣ……。大根が一本ふはり〳〵流れてゐたのはこの船に食糧を積込む時落したらしかつた。

噫、かくして忙（セハ）しい二年餘の臺灣滯在を終へて僕は今彦根にゐる。すぎ去りし日のことを思浮べてはもう一度臺灣へ行きたいな——と思ふのである。……おゝ此皆一場夢か？……

優勝當時の感想

西川寛一

打ち續く炎熱は球場をやき盡さんばかりにして選手の意氣いやが上にも高く、數千の觀衆球場をつゝみ、さしもの尾花川原頭の球場も野球ファンの爲に立錐の餘地なきまでに埋め盡くされて居ります。

嗚呼!! 今あの日を高鳴る胸をおさへつつ懐顧すれば、もしもアナウンサーがゐたならば、まさしくこんな言葉を發したであらうと思はれます。それ程に當日は所謂絶好の野球日和にして多くのファンは球場に滿ち、歡聲は天をも破らんばかりであり、吾等の鬪志は何とはなしに戰き、互に平氣をよそほつてゐても不安な氣持がしてならなかつた。

吾が部の不振以來寒風吹く中をも炎熱やくが如き中をも物ともせず、互に勵まし勵まされ乍ら、縣下の否、天下覇權を握らん事を誓ひ乍ら努力せしも今迄は遂に利あらず尊い汗の結晶は涙となつて終つた。然し今縣下の覇權を握るか否かの大切なわかれ目に來てゐる時に吾等は等しくその眞實を疑はざるを得ない樣な氣がしてならなかつた。入部以來始めてのぞんだ優勝戰に自分は實際うその樣な氣がしてならなかつた然し勝たねばならぬと云ふ堅い決心と、必ず勝てると云ふ信念と又はつきりしない氣持との入乱れた氣持をもつて愈々開戰の宣告プレイーボールの聲をきいた。

吾が部のスタートは一寸始めに乱れたがそれも一寸非常に好調子に進んで、二、三、四、五回と進むにつれて益々よく皆んな球友は元氣にして敵との差は益々開き七、八回となると遂にもう勝てると云ふ始めにもつた強い信念が實現された樣に思はれ八回目頃には優勝と云ふ字が始めて頭に浮んだ。然しその安心も束の間ラストイーニングでの波瀾は自分のすべてを忘れさせその回復に努力した。唯元氣を出し球友を勵まし自分の出來るあらんかぎりの事をして戰つた。

九回のピンチの時など自分は唯もう夢中だつた。すべてを忘れてゐた。そして投手の手から投げ出される球の一球々々に自分の身体は支配されてゐるかの如くであつた。然しそのピンチも瞬く間に打破し遂に勝つた。十對四の大差をもつて然し審判のゲーム・セットの聲を聞いた時は自分は唯勝つたと云ふ考へしか浮かばなかつた。唯彦中ファンの狂氣の樣なよろこびがはつきり心に殘つてゐるだけで……。

優勝旗授與式、新聞社訪問等、唯無意識の中に過ぎて宿に歸つた。自分は始めて嗚呼！自分達は優勝したのだ。遂に吾等の宿望はかなへられ縣下の覇權は握られたのだと云ふ事の出來ぬ歡喜がこみ上げて來て思はずまぶたの熱くなるのを制する事が出來なかつた。

小春日和

西島輝夫

足を痛めた彼は、今日も又裏の日向に椅子を持ち出して、どつかりと足を投げ出してゐた。小春日和の暖さは丸く猫の様な脊に着物を透して微かに暖さを感じさせてゐた。彼は大きく欠伸をして、ふと上を見上げた。全く黄葉したざくろの葉が命大事とかじりついてゐたり、或る物は下に落ち幾分か地面を黄色く蔽うてゐたり、又或る物は蜘蛛の巣に引掛つてぶらんこをしてゐた。黄葉した先に眞赤な、ぽつかりとはぢけた實が落ちようか、落ちまいか、落ちたつて下の黄色い毛氈がふうわりと受けとめてくれるから大丈夫だ、けれど、未だ早くはないかしらと思案の体で、ぶらりぶらりと秋風に搖られてゐた。其の隣には日に照された眞赤な柿が、陶工柿衛門でなくとも誰れもが一目見たらきつと「あゝ、あの色が出して見たいなあ」と思はれる様な色合で、黄葉をバックに綠の柿の葉蔭から覗いてゐる。其の根方を見ると、今が頃と楓が紅葉してゐる。その赤さも又柿のとは一種異つて何んとも筆や口では述べることが出來ない美くしさであつた。又柿の根方から北にかけて植えてある草花も春から夏にかけて、立派な可愛いゝ花を附け燒けつく様な太陽の下に其の健康美を誇つてゐたのに、秋となつてやつと人間が暮し易くなつたと云つてゐるのに引きかへ、地上にはら這ひ風の吹く度に喘いでゐるのが見えた。然し其の先に可愛いゝ眞當に小さな花を一二輪附けてゐるのを見た時、彼は其は花が彼に何か彼の境遇をでも暗示してゐるかの様に思はれ、彼は思ひ出した様に痛める足を擦つてほつと溜息をついた。

其の時彼の耳をかすめて飛んで來た一匹の蜂が、彼の前に置いてあつた本の上に止まつた。彼は周圍の秋の景色よりこの小さな一匹の昆蟲に興味を持ち、ぢゐつと其の蜂を見守つてゐた。其の蜂は彼に見られてゐるとは知らずに、いや假令知つてゐてもそんな事には無頓着な様子で、本を左の端から右の端へ横切つて歩き始めた。其の間始終觸角をぴく〳〵動かし頭をかしげて、何か思案をしてゐる様に思はれた。そしてふと其の蜂の脚を見ると後方の一本が延びたまゝで、不自由さうに心持ち跛を引いてゐる様子であつた。彼は其の蜂が自分である様な氣持がして尙一層注意深く其の動作を見守つた。さうする事が蜂の習性だと言つてしまへば何んでもないが、今の彼としてはそれを唯習性だとあつさりと、かたづけ

る事は何んだか心が許さない様な氣がした。

フと蜂がぶうんと飛んだ。彼の心も、彼の体も、あゝ飛んで行く。蜂が青い青い、高い高い秋の澄み切つた空に上つて行く……。それにつれて彼の心も青い青い、高い高い、澄んだ空に吸はれていつた。

紅山流水

徳永正俊

前山の山腹に楓があか〳〵と茂れる中に、寺のいらかはしと〳〵降る雨に一段と黑さを增してゐる。

遠く山々の頂は天に連り雨雲はひくゝ山はだをおほつて近くは黄色く、赤く、彩られた山々のみが目前に連る。

落葉の一二葉散り來りさびしさのクライマックスに達す。

いざ行かむまだ見ぬ山も見む、このさびしさに君は耐ふるや。

牧水の詩がこの山里の秋の景色にかなつてゐるのではないが山を見てゐる時には自然さびしさの感情がわき出でていらただしくなるのである。

スタート

井上顯敞

七月二十八日。

彦中野球部が遂に全國野球大會の一次豫戰に優勝しました彦根町は夕方からさはぎ出しました。お濠の外の道を樂隊がにぎやかに行きます。澤山の人々も……、みんなみんな停車場へ野球の選手を迎へに行きます。

野球部の優勝がこんなに彦根全町の喜にならうとは思つて

ねませんでした。私は――。

この野球部の優勝とそれを迎へる彦根全町のにぎはいは、我等ボートマンにも強い刺戟でした。やがて全國中等學校競漕に出る我々ですもの、

「ようし、我々も優勝するぞ！　優勝しなけりやならないのだ」

合宿所（寄宿舍）で我等は、かたくかたく誓つたのでした

我等は明日の遠漕の準備が終ると、直に床につきました。明日が早いから……。

× × ×

七月二十九日。

朝三時、皆起きて用意をしました。今日は大津まで遠漕です。

野球の選手は今安らかに眠つてゐます。月の桂の冠の夢を見てゐることでせう。

五時、我等は意氣高らかに出艇しました。オールの響は高く朝の空氣をひびかせて、艇は水上に浮びました。

やがて我等は艇上の人となりました。もう明るいです。けれど朝もやがこめてお城もぼんやりしてゐます。鳶が一羽飛び出しました、ぽつぽつ和船が動き出します。

コックスの聲は高らかにお城の緣にこだまして、艇はすべり出しよく朝の湖上へ……

湖上。もう明るい湖上、波がしづかです。長濱も、多景島も、沖島もうすぼんやりと見えます。松原の家々はまだ眠つてゐるやうにしづかです。

おゝ、壯觀!!

東山の上には眞紅の太陽がおどり出してゐるではありませんか！　赤く赤く眞赤に燃えてゐます。我等の肉体は、我等の筋肉の一つ一つはおどり立ち、血潮はいやが上にもわきかへりたぎりたつのです。

あの太陽のやうに――。

「レディー　ゴー」

コックスの聲に遠漕のスタートは切られました。

「後四十分」我々は一氣に四十分で柳川まで行かうといふのです。今日大津まで行くことを考へれば、四十分のロングも何でもありません。我々は意氣で漕ぐのですから……。

心地よい朝風は輕く我等の頰をなで、艇尾の旗をなびかせて……。我々は確實に一本一本オールを入れました。今日こそは平常にまさる我等の忍耐力を試す時です。

高くそびえてゐる鐘紡の煙突も、緣の城山もだん〴〵遠くなります。遠くなるにつれて朝もやでぼんやりして來ます。夢のやうに幻のやうに……

おゝ、城山よ！　我等が日々の慰安と崇敬の城山よ！　さらば！

（遠漕の記より）

田舍の香

杉山十三雄

川原の眞砂が敷かれた野路を、見すぼらしい百姓爺が、臭いが併し黃金色の香水が一杯入つた肥桶を載せた車を引きずりながら畑へ、鈍間な歩みを續けて行く。野分が颯と一陣木の葉を亂舞させながら頰を掠めて通り通ぎた。おう！　寒い。田吾作か、それとも權兵衛か、私には未知の人ではあるが、其百姓爺公に、堪らなく親愛の情と興趣とを感じたのである

眞黑く日燒けした顏、健康そのものが窺はれる身躰、年は既に七十の坂は通り越してしまつてゐると考へられる。此の年まで無病息災で田園生活を繼續して來たのであらう。襤褸の半纏に股引を著た姿は貧乏らしが、何のその眞實はしこたま持つてゐるに違ひなからう。虛榮心に驅られた馬鹿者が月賦に苦しみながら著てゐる綺麗な衣服より襤褸の方を心から私は讃美する！　假面を去つた人間の純正な姿である。

爺さんも大部歩んだ。腰に吊した日本手拭の稻穗の染繪が風の吹く度毎にひらりひらりと遙かな秋の田の黃金の波を偲ばせる。「火の用心」と縫ひつけた煙草入は中身たつぷり圓くふくらんではみ出てこぼれ落ちさう。粗末な煙草と思つて見つめてゐる中に、爺さんは一服やり出した。車を止めて古びて苔蒸した道しるべの臺石に腰を下しさも美味さうに！。鼻から八の字に、寒い冬の街道の荷馬車の駄馬の鼻から吐き出す白い臭い息の樣に――。煙を吹く傍には藁が積まれてあるので風が來ず爺さんは一向暢氣さう。吐かれた煙は始めは濃くて、煙管をしつかり握つた手元に漂ひながら次第次第に舞ひ上り肩から頭の天邊に至る頃には、稀薄になつてしまつて

もう肉眼では見えぬ程かすかなものになつてしまつてゐる。二服、三服……と相も變はらずぷかり〳〵。何と言ふ暢氣な爺なんだ！ 時は三二年の、而も師走間近、そして極めてスピート時代の逆行だ。短い冬のお天道樣は間もなく西にお入りになり、春づく頃となるのに。

私は何故か馬鹿に感心した樣な？でも懶い樣な心持になつてしまつた。氣を紛らす爲に、退屈しきつた心を慰さめる爲に、道端の小石を一つ輕く蹴つて見たところが、くる〳〵と鮮に宙返りしながら谷間から下つてゐる清い美しい小川にどぶん!! 否、水音も小さく僅かばかりの繁吹をあげて飛び込んだ。蹴られた小石自身は立派なダイバーの心算なんだらう可愛い〻奴だ！ つう〻〳〵〳〵と小さながらにも波紋を描いたのが思はず莞爾と微笑ませられた。

百性爺さんは頻りに畑に肥を播いてゐる。養分を與へられてゐるのは何かわからない。唯嬉しさうにひら〳〵する青い葉が見える。私は菜食主義だが、其野菜類の成長の有樣を不圖食事中に想像しては痛切に厭味を感じるのである。大根の葉でも蕪のそれでも、成長し摘まれて我々の舌に載る時には新鮮（フレッシュ）な感覺と共に充分なる滋養分を供給してくれる。私は殊に蕪が好物の一つだ。だが併し現實に眼のあたりに肥をやる所を見せつけられては堪まらない。町の公設市場や通り路の八百屋の店先に飾られて清々しく見える時、私は完全に魅惑されてしまつて何時までも飽きもせず種々の野菜類が發散する一種獨特の快い香氣に醉ひながら一人點頭くのである。そして私は金さへ持つて居れば買つて喰ふに少しも躊躇しないのである。

浮世は萬事知らぬが佛である。未だ知らぬもの程い〻ものはない。秋になつて柿の出る頃でも味を知らない間が私にとつては最も美味しい時なのである。又野菜類でも何も知らずに喰ふのが一番良い。あの臭い大便、小便が畑に播かれてゐるのを一度見てしまふともう嘔吐が出さうになる。すつかり憂鬱になつてしまつてそれを喰ふことは出來ぬ。勝手のい〻奴は人間だなあ！こうした事を考へてゐると、ふ〻んと嘲る樣に鼻が鳴つた。私は爺さんをみつめたま〻、數歩して始めて四顧を見渡した。汚いのは田舍道だ。藁屑だの紙屑だの否それよりは馬と牛の、地上の一劃をよごす厭なもの——。此處彼處に、往來の眞中に偉らさうに散在してゐる。掃除しようとする衞生家も片田舍だからないのらしい。一般に農村の人間は平和だ。純眞だ。自然的生活者だ。路上に轉がる良い肥料も拾つて使用しようといふ慾張り人も無いのらしい。牛

のなんか實に嫌ひだ。小石にくつ着いて乾いてかちかちになつてゐる。折柄道の近くの納屋から白い小犬が一匹短い尾を振りながらちよこ〳〵驅けて來た。私は思はず「何てまあ可愛らしい奴だらう！」と獨語した。其一瞬間馬の藁の澤山入つたのにぱくついた。驚いてしまつて「開口不能閉」といふ狀態に陷ち入つた。生理的に胸が燒けるから喰ふのださうだが、私はげつそりして、其小狗犬が愛しいといふ心持は何處かへすつ飛んで、微塵も無くなつてしまつたのが悲しく思はれた。視線が道に添つて徐々に移動し始めた。所々に大小の凹みがあつて、昨夕の時雨の名殘らしく僅か溜つてゐる。其の一つ一つが乾いた湖の樣に見えた。——それから足跡のいかに多きことよ！でも此頃は道にバラスが敷かれたので、減多に無いが敷かれてない處には藁草履のが目につく。草鞋の足跡は最もなつかしい。大きいのと小さいのと斷續してほそ〻〳〵と何處までも續いてゐる。多分母子の巡禮者のだらう。杖の跡も一緒に見えて私は何となく淋しく悲しい。姿を見ない巡禮の旅を思ひやると共に幸福を祈つてやるのだつた。道!!私は道を注視して物思ひに耽つてゐると何とも言へない心持が湧き起つてくる。大都會の近代文明で塗り固められた舗道よりも田舍の土そのま〻の香氣がする道が好きである。私には生物の樣な感じがするからである。俗惡な現代の空氣から脱して大自然に親しみ其の懷に抱かれて、愛撫を受ける樣な感じがするからである。一般的に種々な暗示を我々は與へられてゐるとも、私は言へると思ふ。日毎夜毎に澤山の人々に踏みつけられてゐるが、默々として甘んじてゐる。從順そのものだ。沈默の象徵（シンボル）だ！そして何かを秘めてゐる樣だ。大地に強く根ざして大地を遙か雲表に拔きんずるもの山嶽！久遠の生命を與へるもの、大聖聖の感じを吾人の腦裏に意識せしむるもの山嶽。私は山に髣髴たる感覺を道を思ひ見る時最も激しく心に打たれるのである。山嶽は立體的で巍然としてゐるが、道は平面的なのが一層奥床しくやさしいのである。

不意にはら〳〵と二葉三葉、傍の銀杏の大木が枯れた眞黄な殘り葉を震るひ飛ばしたのであつた。一葉は私の足下に落ちて旨く厚齒の下駄の下に避離したが、他は皆道の上を轉びながらずつと遠くへ行つてしまひました。足元に落ちたのをそつと掌に拾ひあげて見ると、蟲が浸したのか哀れにも種々な穴がある。葉脈も大部分腐つてゐる。私は叮寧に水葬してやつた。

田圃の畔に、大きな杉が三本ある。風が吹く度毎に、さわ〳〵囁き交はしてゐる樣に聞える。私の立つてゐる處からは

實に田舍の情景が良く見渡される。どの家も皆藁葺だ。草深さがひう〳〵と身に迫る樣だ。其の家々から炊煙縷々として高く底く棚引く樣は實にいゝ。時に私は「蔓破れては霧不斷の香を焚き、扉落ちては日常住の燈を掲ぐ」を想起して一層古典的な素朴なものを感じた。先程の爺さんが野良から家路へ向つてゐる。私の横を、單調な併し情のこもつた俚謠を唄ひながら通り過ぎて行く若い馬子らしい人がある。私は欵乃と共に、村里で盆踊りの時など唄ふ民謠が、こよなく好きである。それは農民藝術の華である。もう冬籠の準備も出來上つたらしい。蛙も蛇も見あたらない。寒くなつたから農家の近くを通りながら歸り始めた。味噌汁の嗅ひ、鰯の生臭い煙り、どの家も夕餐の團欒が樂しさう。道を歩みながら井戸端で、鹽漬の茄子や黄色い漬物を洗ふお神さんの姿も見へる。軒に吊した百姓道具が、何となく暢氣さうにも見へる。諸君よ田舍はいゝとこだ。一度農村の長閑さを、平和で靜淨な空氣を腹一杯呼吸して見給へ！御身等の神經衰弱くらいは必ず癒えるであらう。田舍の馨りを呼吸しながら、私は生涯を土と共に生き、共に活動したい。私はいつか元の大地へ、肉體と精神と一緒に歸つて行くのである。

寒念佛

林　榮一

今日は一月六日だ。小寒の入りだ、でも暖い。寒だとは思へない、まだこれから寒くなるだらうが……。

この寒中にやる事は、かき餅つきを必ずする、寒の水がよいのだとか。それよりも鐘ただき、太鼓ただき、法螺貝吹いて來る寒行僧がある。今夜もきつと一年ぶりにあの鐘の音を聞くことが出來るだらう。

×

カン〳〵村の端の方から高い鐘の音が聞へて來た。妹は早速錢を持つて待つてゐる。カン〳〵〳〵と急速に鐘が鳴る、家の前で念佛を唱へて居られるのだらう。鐘の音が增し、そして大きくなつた。自分の家に近い、妹が錢を攫んで飛び出した。黑い衣に黑い頭巾で頭を覆ひ、首から四角な箱を下げ同じ樣に鐘を下げ、木槌でそれを强く叩きながら此方へ歩んで來る。鐘の音の間に下駄の音がカラ〳〵と聞える。妹が箱へ錢を入れると、チヤリと音がする。同時にカン〳〵と鐘を叩く「願はくはこの功德を以つて……」と早口に口から出

て來る。終りの方がはつきりしない。終れば禮をして次の家へ行く。聲が聞えなくなり、鐘の音が小さくなり寒行僧は村の端の方へ行つてしまふ。時折犬の鳴聲が遠くでする。吠えついてゐるのだらう。軈て小一時間も經てば又引き返して來る。その時の鐘の音は暖い寢床で聞くのが平常だ。あの坊さんは尼さんで、これから正法寺へ歸るのだ。

淋しい〳〵田の道を通つて、山の切通しを通つて、燒場の端も通るのだらう。坊さんでも恐ろしいに違いない。こんなことも妹が言つてゐた。毎年毎年寒念佛にやつて來る。あの尼さんは何んだか懷しみを感んじる。一晩でもあの懷しい鐘の音を聞くことが、出來なかつたら、「どうしたのだらう」と家中で心配するのだ。次の夜出て來た時にはどこの家ででも「どうしたのです」と必ず問はれるのだ。

寒中と言へば決して今日の樣な暖い日ばかりではないのだだが例へ雪が降つても、風が吹いても、毎日出て來る。

又いくら恐ろしくても、淋しくても、毎日出て來なくてはならない。苦行し、修養し、そして身を治めて行くのだ。寒行には雨が、雪が、風が、そして寒さが敵なのだ、障碍なのだ。我々が修業して行く途に、矢張その樣な障碍があるのだ寒行僧が、寒があけて、障碍を踏み破り、その苦行を成し遂げし喜びに浸る時が恰度我等が身を立て、立派な人間と成つて喜ぶ時と同じである。

强く響く鐘の音は、障碍に負けるな!!。眞直に進め!!。と私の胸に響いて來る。

懷い鐘の音は、私の心の警鐘として鳴り響くのだ。

私の頭が夢路を辿らうとしてゐる。鐘の音が自分の寺へと道を辿つてゐる。

密柑

中村音次郎

僕は今密柑を見てゐる。机の前の籠にある黄金色の密柑を見てゐる。小春の樣な暖い冬の日の正午近く。明るい、併し眩しくないミルクの樣な甘い光が、部屋一杯に入つて來て、僕のノートの上に薄い〳〵ペンの影をうつす、密柑もその甘い甘い光を啜つてゐる。

「おゝ、籠の密柑よ、何といふお前の肌の美しいことよ！その生々としたことよ！此の美しさこそ、所謂健康美でなくて何であらう。暖い山の手の密柑畑で、眩しい太陽の光を受

けて、日毎に健康美を增し、遂に今のお前となつたのだらうそして、お前を見てにつこりと微笑んだ密柑取が、チヨキリとお前を切り取つたのだ、美しい鋏で。それ迄毎日々々密柑畑で、朝太陽が見え始めると自分の顏に附いた露の玉を拂ひ落し、それから永の永の日中を、澄み切つた青空に映えながら、太陽の熱を飽食してゐたのだらう。丁度お前の日課のやうに……。いや、これがお前の一日々々の仕事だつたのだらう。その間に築き上げたお前の健康、お前のすこやかさ、お前こそ正に病氣知らずの果物だ！親類の林檎は赤味の片顏は眞青な病ひ顏、梨にしても、寒くて堪らぬのか顏に粟粒を一杯出してゐるじやないか、これも健康な果物とはいひ得ない。それにお前は强いなあ、吹雪の飛び狂ふ冬の日と雖も赫々とした黃金色をしてゐるじやないか」こんな事を考へ乍ら僕はつと手を延ばして、艶々する密柑の面を撫でてみた。密柑取の爪の痕が小さく〳〵押されてゐるやうだつた。そして顏一面には、針で障子紙を突いて出來た時の樣な小さな〳〵孔で一杯だ。そしてその小さい〳〵澤山の口を開けて、僕に何だか話してゐる樣だ、囁いてゐるやうだ。僕は密柑を取つてそつと耳許に當てゝみた、併し密柑は何とも語らなかつた唯、ほてつた僕の耳には、密柑の微かな〳〵そして暖い血脈の響が聞えたのみであつた。

突然置時計のセコンドが高くなつた。十一時半だ。

「僕の來るまで其處にぢつとしてゐるんだよ。」

僕は力の溢れんばかりの、そして今にも籠から這ひ出しさうな密柑にかう言つて置いて机を離れた。

夏休みの思ひ出

島本八郎

七月二十八日、我が野球部が縣下大會に優勝した晩だつた自分は勢よく堀端を走つてゐた。青い幽靈の樣な柳の枝も、沈默を破る不氣味な鳥の叫びも、その時自分は何とも感じなかつた。輝く優勝旗、晴やかな選手の顏……云ひ表せぬ喜びがわく〳〵と湧き起つた。そして短氣な私には自分の足ながら切つてしまひたい程のろく〳〵思はれた。

驛前には多くの人々がごちや〳〵としてゐて、丁度蟻の群の樣であつた。そしてそれ等の人全部が恵比須顏でがや〳〵と愉快に語り合つてゐた。

九時四十五分!!ごうつと榮ある選手等を乘せた汽車は勇ましく驀進して來た。幾百人のどよめきは、雷の如く、果ては百雷の如く響き渡つた。

「萬歲々々」パチ〳〵〳〵〳〵

萬歲の叫び、拍手の嵐、群集は我を忘れて熱狂した。窓の內部が次第にはつきりして來て、汽車はガツタンと止つた。軈て、輝く優勝旗を手にした松井主將を始めとし、顏が火照つてポツと赤くなつた選手一同は、抑へ切れぬ感喜を顏に表して、悠々とプラツトホームに姿を表した。喜びの波が益々强く胸中を躍り狂ふた。

お〳〵!! あの時の選手の晴やかな笑顏よ!! 一敗地に塗れて淋しく悲しく、こそ〳〵と校門を潛る時と違つて、何といふ堂々たる雄姿なのだらう!!

勇壯な樂隊の調が、夜のとばりの中に消えて行つた。丁度此の喜を町全体の人々に傳へる樣に……

除夜の鐘を聞きつゝ

安藤權一

不圖僕は無意識に、時計を見た。十二時十分前である。もうあと十分で、新しい昭和八年が來るのだ。慌しい新年の仕度も濟んで、お正月を待ちこがれて騷いで居た妹達は、もう樂しげな夢を結んでゐる。

ぼうん……ぼうん……突如僕の耳に響いたのは、昭和七年の終りを告げる除夜の鐘であつた。生れて始めて聞く除夜の鐘。僕は夜の冷い空氣の中を、餘韻を長く引いて響いて來る鐘の音を、飽かず聞き入つた。ぼうん……ぼうん……鐘の餘韻が、空へ浸み込む樣に聞えなくなると、間もなく次の音が聞えて來る。嗚呼、何と淸澄な嚴かな音であらう。二階の窓に腰掛けてゐる僕は、淸らかな鐘の音に聞きとれて何もかも忘れてしまひ、只管に無我の境地に入つてしまつた。

除夜の鐘は、不斷朝夕聞くお寺の鐘とは異なつて、其の鐘の音の中には、何か我々に暗示を與へて居る樣に思はれる。「弛む心の螺旋をしつかりと卷いて油斷をしてはならない。今や日本は、重大な秋に直面して居るのだ。」と鐘の音は人々に告げてゐる樣だ。

昭和七年は逝く。多事多難の昭和七年は、除夜の鐘と共に去る。「光陰矢の如しとはよく言つたものだ。僕は年の暮になつて、時の餘りに早く經つことを、はつきりと意識した。春過ぎ、夏來り、果は秋が去り、冬が訪れ、其のめぐるましい

回轉は、矢よりも非常に早い。もう昭和七年は永遠に二度と來ない。將に過ぎんとする此の一箇年を、如何に暮して來たかを回想する時、誰にしても、色々の自分の行に就いて反省し、且何故もつと努力しておかなかつたかといふ後悔の念が湧いて來るであらう。

想ふに昭和七年は、文字通り多事多難であつた。內外共に重大で實に息づまる樣な年であつた。外に滿洲事變の次に上海事變が突發し、聯盟に對する問題が起り、內に財政・經濟問題があり、その他の諸問題は一々枚擧に暇がない。又愉快だつた春の休み、關東へ旅行した樂しさ、その反面に母を亡くした大きな悲しみ等が、次から次へと映畫の如く思ひ出される。

何不自由なく樂しくお正月を迎へられる我々を考へるにつけても、酷寒の滿洲の平野を馳驅する我が皇軍の將士達の、大なる勞苦を思ふ時は、決して浮氣にはなれないと思ふ。我々は將士達の、奮鬪に對する感謝の念を捧げると共に、一生懸命に、勉學に精進せねばならないと誓つた。

ふと我に返へると、まだ鐘の音は莊重なリズムを以て、休みなしに鳴り續けて居る。

新年を迎へるに當つて

加藤　澄

慌しき、師走の暮も早や殘日となつた。それと共に日一日と新年が迫りつゝある。戶々にては餅搗。正月の仕度に忙がしく、商家では正月をひかえての、大賣出し。世の中すべて新年に對して、準備の眞最中である。嬉々として遊ぶ子供も凧上げ、其他に新年の來るのを一日も早かれと、待つてゐる

何故、新年はこの樣に、樂しく、又嬉しきものだらうか。年が改まり、此の一年の最初の一日に當る、唯單にそれだけが、正月なのか。否、否、其處にもつと、深き意味が有るに違ひない。此の一年を反省して見よ。如何に自分は勉めて來たか。改むべきことは、無かつたか。誰にしても有るに違ひない。その改むべき缺點を反りみず、新年は目出度い、樂しいと過し、その浮いた心で一年を過すならば、人の一生は如何であらう。僕はこの新年を實に重大なるべき基礎だと思ふ過ごして來た一年、それは長い一年と思つてゐたが、落ち來る瀧の水の如く早く、濟んでしまつた。一年をただ徒らに、生きてゐたかの樣に思はれる。「人生矢の如し」實にその通り

である。成すこと無く、ただ一生を無駄に送ることそ、我が國民としての最大不忠である。それなれば、一生を價値ある樣にするには、どうしたらよいか。それは正月にあると思ふ。一月一日、正に年の初まりである。前に惡かつた所をしつかりと自覺し一月一日を引きしまつた氣分で過ごす。この氣分を一年の間、一生の間、持續して行けば、その一年、その一生こそ實に、貴きものである。

その新年、心の基礎と成るべき、新年が、後僅か二三日に迫つた。

今までの事を考へ、惡きを改め、この新年を眞に樂しき新年として迎へ、價値ある一年を送らう。

（昭和七年十二月二十九日作）

月

野村　忠吾

風呂から歸らうとした。手拭を肩に掛けて。

寒風颯々と膚を劈く。又一陣又一陣電線は此所を最後と唸つてゐる。思はず身振ひする。けれどこの寒い夜に、雲一つない夜に、青い疲れきつた光を前の家へ、僕の上へ、道へ、總て平等に送つてゐる。

古今東西の人々にあの月は淋しい光を與へてゐる。詩に歌ひ歌に詠じて、又これからも何千年、何萬年あの月は人をして自ら詩的情緒を橫溢せしめるであらう。淋しい、人一人通らぬから〳〵に乾き切つた道を一人で行く時、淋しい！薄ぼんやりしてゐる向の景は尙一層淋しい。思はず歌が歌ひたくなる。そうして身振ひがする

愁を、惱をこの月に訴へる人は今何人ゐるだらう。何だか僕も平素の不平があの月に訴へたくなる。故鄕の母も亡父の靈をあの月に求めてゐるであらう。故鄕の狀況をあの月が知らせてくれたらなあ。こんな寒い夜でも一夜中此所にゐて聞いてやるのに。今きつと母もこんな事を思つてゐるに違ひない。この月があゝ、やつぱり母と僕の心をお互に通じてくれるものだ。寒風は尙吹きすさぶ。

或日の朝

廣部智彰

慌しい師走も朝の間は、ガラ〳〵と赤茶色の銅で造られた罐を乘せた車を、誰も喜ばない喧しい音を立てゝ、町中を曳きずり廻し、家々に白い瓶を置いて透明の瓶を持つて行く乳屋さん、コトツと表の柱とガラス戸の間へニュースを投げ込んで人々の眼を丸くさす新聞配達夫「お花やーい」とかすれた聲を周邊に響かせて、背に色々の美しい勳章をつけた物を入れた箱の樣なものをおんぶして、賣り歩いてゐる花屋の皺くれ婆さんや、何處かの工場の女工達の一群のみで流石に人出も少ない。登校の際何時も出遇ふ小間物屋の小僧さんに、今日に限つて遇はない。彼は今日は寢過ごしたのかしら？……何だか變な氣持がする。

今、朝は、淡い霧が湖北一帶を包んで、薄化粧を裝つた靈峯伊吹の麓を隱して顏だけをぼんやり見せて居る。コバルトに透き徹つた寒空を雀の一群が急にバタ〳〵羽を動かして眞西へ飛んで行つた。風は無いのに僕の造つた小さい泡が上つたり下つたりして、十二三間も遠くへ行つてから、どう思つたか「パツ」と割れて黃金色に輝いてなくなつた。十二月も半ばだけに、流石に寒さが骨身にヒシ〳〵とこたへる。鼻から出る息が目立つて白く見える。ブル〳〵と思はず寒氣がしたので、マントの裾を寄せた。後の方からボロバスが道一杯になつて大きな休をガタ〳〵左右に振つて此方へやつて來る

如何にも暢氣さうに——　たつた老人一人を乘せて——

ボー——七時廿分の列車の汽笛だ——　我等の汽車の汽笛だ。驛は薄黑く見えるが約二、三町はあるであらう。何とも云はれぬ氣持で四ツ辻迄來た時、右側の通りに、まあ何と大膽なのだらう。僕よりもずつと〳〵三町程も遠くから、四、五年の人や高商の二年のサボ達が、何か語り、何か笑ひながらのそろ〳〵歩いて來る。僕も之でやつと大膽になつて、普通のスピードで歩き出した。ゴー巨鯨はムク〳〵白煙を吐きつゝ驀進して遂にプラットフォームに頭を現はした。何だか心が愉快になつた。……ジヤケツをまくり、腕時計を見れば七時十六分の所を長針が示してゐるから……　やう〳〵の事で驛の開札口迄來て、驛の柱時計を見上ぐれば十七分。故意と時計を合はして思ひ切り落ち着いてフォームに出た。驛員の外送りに來てゐるらしい二、三人の一家族以外には誰も出てゐない。意氣揚々列車のドアを開けた。むうと或一種の忌

な臭が鼻をつく。勿論スチームと煙草の煙と人の息とで成つた氣体なのだ。ルームの人々は、大分のぼせた樣な赤い顏して僕を見つめた。僕も寒い所から暑過ぎる程溫かい所へ急に入つたので、頭がボーンとぼけた樣に、体全体に電激を受けた樣になつて了つた。

暫らくして始めて我に歸つた時は、体は青い腰掛の上に居て、列車は米原へ米原へと湖北の平野を煙を長く長く棚引かせながら、驀進してゐた。

鏡　餅

伊藤芳男

僕はカルタ取りに意屈して臺所の板の間に腰掛けて床の間の掛軸に見とれて居た。

不圖何の氣なしに竈の方を眺めると、まん丸い滿月の樣な鏡餅が初春の柔かい日光に照らされて輝かしい光に滿ちて居る。その綺麗な頭の上にちよこんと腰を据えて人の目を暗すかの如くにごりごり、ばりばり、齧つて居る奴がある。何は捨ておいても僕の大好物の鏡餅を食はれてはじつとして其の儘見過す事は何うしても出來ない事だ。

「おのれ、糞ッ、かうしてくれん。」

と上半身を竈の前に突き出して彼を一氣に捉へてやらうとした。が元來彼は動物界一のこせ〳〵家だ。だから中々すばしこく其の上目・耳共に完全無缺の彼に對しては愼重に敵對行動を取る必要がある。そこで暫時の間敵の樣子を探る事にした然し敵も中々用意周到な奴らしい。時々ちよつとこつこつかじつては、ちよろッ、ちよろッ、と周圍の樣子を見る。又暫く咬つては周圍を見る。そうして遂に僕を見た。細長い顏、出張つて口尖、つんと立つた二つの耳、よく見ると當に彼は近頃盛に僕の家の道具を咬る鼠だつたのだ。道理で色は灰色をして居る。鼠は僕を一目ちらッと見るや、ちよつと首を傾けたが、今迄無造作に餅の腹の邊に乘せておいたゴムの樣な尾をくるりと卷いて、はッと思ふ中に飛び降りてしまつた。三寶の後へ隱れたらしい。その恰好の妙。實に鼠十八番の早業だ。

暫く竈の蔭に休んで鋭氣を養つた彼。二三回ちよこちよこッ、と歩き廻つて僕の樣子を窺つた末、愈々決心したか竈の半分あたり迄する〳〵と上つた。本當に猿以上の巧妙な樣だ其處でも又ちらりッと僕の樣子を見た。餘程僕がこはいらし

い。そう思つて居る中にさあつと裏白の蔭に身を潜めた鼠は見る間に素早く鏡餅の上に飛び上つて、再び決死の覺悟で、がりがり、齧り初めた。

その途端今迄鼠の咬つて居た處を見ると一點のひびりも無く滿月の樣な鏡餅が、不思議にも大きな口を開いて笑つて居るのがぼんやり見える。摺鉢の樣な口だ。

此を見た僕、驚くやら悔しいやらで一杯になつてしまつたもう許しては置けない。「どん」と一發大砲の如き大聲で奴鳴つてやつた。それと同時に機關銃の銃聲の樣な音を雨霰の如く浴せかけた。少しの音にも驚いて逃げる臆病者の鼠が、俄に萬雷の如き音聲を耳にしたのだから、大變周章てたらしい暫くは彼所へ飛んだり、此所へ走つたり、えらいふためき樣だ。が流石は鼠だ。遂に血路を見出したか、電光石火の如き勢で戸棚の後へ隱れてしまつた。それと同時に鼠以上の狼狽振りを示したのは僕だつた。それから暫く鼠は竈の方へは來なかつた。遂に僕は彼を安々と逃がしてやり、其の上大好物の鏡餅まで御馳走してやつた。僕としては馬鹿々々しいやら殘念やらで地團太踏んで口惜しがつた。鼠の奴、今頃は棚の後で腹が破裂する程餅を食べて、いゝ氣になつて晝寢でもして居る事だらう。直ぐ樣前の鏡餅を見に往くと何うだらう。あッと言つて口がふさがらない程大きな口をあけて、僕の方を見て笑つて居るじやないか。本當に大きな摺鉢だ。僕も思はず苦笑した。（終）

元日の朝

中島午郎

時計は五時を報じた。僕は床から跳ね起きて、窓の戸を開けた。氷つた樣な冷たい空氣が僕の顏を撫でた。もう太陽は昇る頃である。東の空はオリーブ色に美しく輝いてゐる。今日は元日だ。舊年よりの時雨は本年も相變はらず降り續いて淸淨の雨を降らしてゐる。僕の心は切りに躍つた。下駄を穿いて庭に出ると、可愛い小雀がチョッ、チョッと鳴きながら櫻の木の間を飛び廻つてゐる。東の空は次第に明くなつて來た。赤い大きな太陽は、今しも新しい世界を照さうとしてゐる。僕は初日の出を拜んだ。そしてこの美しい、神々しい太陽に向つて思はずもかう口ばしつた「おゝ、太陽よ、今年は僕に多くの幸福を與へ給へ。僕はその神々しい太陽に一年の悲を忘れてしまふ。僕は新しい努力の年を迎へた。願はくば

永遠に僕の身心を守られよ」と。若水を汲んで顏を洗ひ、雜煮を祝ひ、亂舞する胸を押し鎭めて學校へと向つた。雨中の巷には門松の綠と國旗の色彩と映り合つて、其處を走る廻禮の自動車も晴れがまし。新年を迎へてあらゆるものが新鮮になつたが、只單に物質のみが新しくなるばかりでなく、心をも入れ換へて新鮮にし、進みゆく昭和八年度には各方面に大飛躍をなさう。

除夜の鐘

和田純乘

鐘一韻一韻程の年の明け。

大晦日の夜、僕は年越しようと決めた。十一時過ぎになつたので、僕は目を潰つて當年を回顧した。時は刻々と過ぎ去つて、十二時のサイレン、否、年の境を指示するサイレンは鳴り出した。嚴肅な年末年始の闇をついて。と突然夜半の沈默を破つて

「ごうん。」

餘韻嫋々と響く寺の鐘。

これに嚴かに、靜かに合奏する彼方此方の鐘。

かくて新春は次第に明けて來た。

僕も家から飛び出して鐘撞堂に來た。新春の淸冷やかな空氣は僕の兩頰を微めた。

「ごうん。」

精一杯に撞いた。と、

「わん、わん、わん」「わん、わん」

慥かに犬の吼聲である。何んだか氣味が惡くなつて來たので、折善く鐘を撞きに來られた人が有つたので、代つてもらつて家に歸り、母に犬の事を話したら、母は

「あれは犬の長吼と言つて、犬の御念佛ですよ。」

と、云はれた。

元日や一系の天子富士の山

落葉

野村忠吾

十二月ももう大晦日に近い。紅葉は殆んど眞裸になつた。昨日も今日も、又明日もであらう。毎日々々一度づゝ泉水の

處を掃く。附近の子供が「掃いても直ぐ又落ちるから、掃かん方が得だ」といふ。けれど何かの本で讀んだ「人間も御飯を食べても一日も經てば透くから食べん方が得だ」と言ふ事を思ひ出した。こんな事を思ひながら一しき掃いて一休した池の表へ木の葉が一枚、ヒラ〳〵と舞ひ落ちた。波に搖られて、ゆらゆらすると鯉が虫かと寄つて來た。赤と黑の二匹の鯉は滑稽な程大きな口をパクリと開けて、一つの葉を取り合つてゐる。落葉は波に乘つてくるくる逃げてゐる。次の木の葉が落ちて來たが、危く苔蒸した岩の端に掛つて、漸く水に落ちるのを逃れた。落ちれば先の落葉の樣に鯉の餌になつてしまふんだに。と先の木の葉は遂に黑鯉がパクリとやつて、すうつと水に潜る。小さな波紋が薄く傳つて足もとで消えてしまふ。とそれに調子を合はせた樣に五六葉が今掃いたばかりの所に落ちた。けれど憎くない。春から今まで親木の世話になつて來たのだ、これから親が冬籠をしようとしてゐる時自ら進んで落るのだもの。何と親孝行な木の葉なのだらう。上の木の葉よ、早く落ちてくれ。僕の今掃ひた清い綺麗な所へ。僕が下で待つてゐてやるよ。決して水にはまるなよ。水にはまると鯉の餌になつてしまふ。何だか胸が迫る。そうしてこんな事が木の葉に向つて言ひたい樣な氣がする。これも初冬獨特の淋しさからであらう。

渚に立つて

寺田太治郎

ソヨソヨと、吹く風に岸の葦の葉先がユラユラと動く。其と一緒に小さな小さな銀色の魚の鱗の樣な、波が、凹んだ石の中へピチャ〳〵と、赤子の行水の樣な音を立てゝ入つていき、又しばらくして出て來る。近くの綱を乾してある杙の中を潜るように一艘の漁船が、スーと音もなく濱の風に搖られて行く。其の後にスーと白い水の線が殘されて行く。其の小波がだん〳〵此方の方へスルスルと面白さうに擴がつて、又同じやうに石の凹の中へ這入つて行く。其の度毎に水に映つた僕の姿と蘆の影が、ユラユラと伸び縮みするのも面白い。

「兄さん」と僕を呼ぶ弟の聲が蘆のざわめく中を通して向の方から聞えて來る。又側の蘆がサラサラと搖れて水の中の雜魚に、ざれてゐる樣に見える。遠くの沖の白石が目立つて見える。先の魚船がスーとまるで氷の上を滑べるやうに走つて來る。コツコツと歩きにくそうに石の上を弟がやつて來た。

「さあ、歸らう」と歩きかけふと向を見るとさつきまでよく見えてゐた白石が、もうぼんやりとして見えない。水の中には小さい魚が葦の根元に休んでゐる。

發車間際

中堀正男

汽車は未だ來ない。中央の大時計を睨みながら、母と二人で白塗の長椅子に腰かけてゐた。隣席の客がしゆつとマツチを磨つて、口にしてゐた卷煙草に火を點けた。口からはぱつぱつと煙が出て、二三度ゆら〳〵と搖れながらすう——と消えて行つた。又磨つて口と鼻からふう——つと出す其の煙がうるさく目の前につきまとふ。咽ぶ樣な煙草の香が、容赦なく鼻から入り込む。

向を見ると、商人らしい男が二人何か話してゐる。その前の方には京都見物に來たらしい田舍の爺さんが、信玄袋を擔つて、切りにプラットフォームを覗いてゐる。もう六時十分だ。汽車は未だ來ない。煙草の煙が又目の前に迫つて來た。

軈て「ゴー」と音を立てゝ汽車は辷るやうに這入つて來る皆は總立になつて改札口に並んだ。僕も母と椅子を離れて、急いで改札口を出た。そして汽車に飛び乘ると座席を見つけて太息を吐いた。今まで聞えなかつた物音や人の聲が急に聞えるやうになつた。どや〳〵と入つて來た人々のために、隣の空席はなくなつた。

「べんとべんと」「さいださいだ」「お茶〳〵」「新聞、煙草……」

賣子の聲が入り混じつて、騷しく聞える。がら〳〵と赤帽の引く小車の音、驛夫の叫び聲、汽笛の音、……僕は林檎を頰張りながら窓から首を出した。と、二人の赤帽が何か私語きながら彼方の方へ行く。三等室には未だ殘つてゐる人もある。

軈て列車は靜かに動き始めた。

滿洲事變

丸山吉夫

一昨年の九月十八日の夜深く橫暴無禮なる支那兵の、柳條溝なる我が滿鐵線路を爆破し、剩へ我が兵に發砲した事件か

ら終に端を發し、我が兵は此に應戰して破竹の勢をもつて支那兵を破り一時戰火は治るを見たが、支那の排日侮日は南支那に飛火し、終に我が陸戰隊は横暴極りなき支那兵と交戰し續いて陸軍の出動となつたのである。併し忠勇なる我が兵は天に代つて横暴なる支那兵を破りて、戰火漸く南支那に治まり、此處に一時平和を見たが、事件は未だ滿洲・支那各地に勃發してゐるのである。此處に我等は今更ながら事件の重大性と、更に滿洲が我が生命線として一歩も他に讓ることの出來ない所以を深く心に印象づけられたのであつた。それと共に更に深く印象づけられたことは、此の事變に於ける我が兵の類なき忠勇であつた。我等は幼い頃より、日清・日露兩戰役に於けるところの忠勇なる將士の話を聞かされてゐたが、現在日本の國の兵士が如何に強く、且どれだけ忠勇に富んでゐるかは、我々にとつて一つの疑問であつた。併し此の事變に於いて古賀中佐・肉彈三勇士・空閑少佐等、其の他數々の人の極りなき忠勇によつて此の疑雲は晴らされたのであつた而して我等は他に超越したる大日本帝國の臣民たる光榮と幸福とを誇らかに他に叫んだのであつた。そうして又深く感じたことは、國民の熱烈なる後援であつた。或は獻金に、或は兵士の慰問に、超人的なる記錄を見せてゐる。獻金によつて飛行機・探照燈・高射砲等種々の國防兵器が製造され、殊に飛行機に於ては先きに全國中學生の赤誠こめた獻金によつて愛國中學生號が造られ、更に海軍機さへ將に獻納されんとしてゐる。其の他全國民の獻金によつて造られた愛國號・報國號正に六十臺を突破してゐるのである。我等は事變勃發以來夏には炎熱の、冬には酷寒の滿洲の廣野を馳驅する將士を思ひ出し、ラヂオのニュースに、新聞に我が將士の活動を知れば、直ちにその苦勞を思ひ、頭に滿洲の地圖を描き出してその活動せる場所を直ぐに知れる位になつたのであつた。

○滿蒙の兵士を偲ぶ冬の朝。

佐藤君へ

金森從之

佐藤君!! 我祖國は今や大なる非常時です。我等國民は一致團結して國難にあたらねばなりません。スイスのジュネーヴにおいて開會せられて居る國際聯盟に、赴かれた松岡代表の困苦は一方ではありません。我國の正々堂々たる偉風にやゝ耳をかたむけ出したのを、さへぎる支那代表は自國の惡いのもかへりみず、帝國の眞心を少しもうけ入れぬは、はなはだふとゞき極る事です。東洋の平和は日支滿の三國によつて定まるのです。我國は支那のふとゞきな心を忍耐して來ましたが、これ程まで排日しようとは思ひもよらぬ事です。我國は常に日支親善に努めて來たのです。しかるに支那は何故に排日運動をするのでせう。我國の眞心が足りないのでせうか僕は、我國はこれまで最善の道を盡して來たと思ひます。決して支那を侮る事は決してして居ないのです。かたをくんで一緒に歩く友達と同じです。一人が無法な事をしてゐるのを止める一人は友達をやめさせて、以後無法な事をせぬやうにすると、そこに始めて友情が有るのです。

國際聯盟も我國の眞心をすつかりわかつてゐないやうです我國のやうに一系相續きて三千年、皇と民の間に血を流す事のないのは萬國にすぐれた所です。いや、三千年も相續かなくとも、一千年位續いて居る國も少いのです。まして支那のごときは、一系斷滅して又、一系あらはるたへまなき國家にて眞の平和を知らないであらう。現今においても國内の爭ひ絶えず、人民は苦しみ豪族は人民より大なる稅を納めさすのは豪族が自分の利ばかりを考へて居るのです。我々國民はさういふ國と闘はなければならないのです。だから僕等は一命をもつて君國に差上げるかくごを持たねばなりません。お互に一生懸命やらうではありませんか。 さようなら

十一月二十八日

金森より

佐藤君へ

冬の夜

馬場國夫

ペンは走つてゐる。帳面の上を、きらきらとした電燈に輝らされて僕は今英語の勉强をしてゐる。時々伊吹おろしの風がものすごくふき當つてあたりの空氣をふるはせてゐる。机のかたはらで無心に弟がトランプをいぢつてゐる、とたんに弟が「クニチヤン」「ナニ」筆記をしてゐた僕は書く手をやめてほつとした「トランプシナイ」僕はまごついた、何故ならば明日は英語の試驗であるからである。僕がしないといふのもかはいさうだと思つたが僕が大切だから仕方がない「シナイ」と言ひ切つてしまつた。弟は怒つたらしい、口でぐつぐ〳〵言ひながらトランプをいぢつてゐる。僕は又ペンをとつ

の星が光つてゐる「ア、明日も天氣だらう」とあにげなしに言つた。僕は何とも言ひ得ない靜けさと寂びしさとが胸にうかんだ。雨戸をしめて床についた。弟はツミのない無心な顔をしてすや〳〵ねむつてゐる。一日のつかれがどつと出て急にねむたくなつた。そして遂に僕は明日の試驗をいのりつゝ夢路をたどつてゐた。

終

た。依然烈風はガラスまどにふきつけてゐる。時々大の遠くでなく聲がきこえてくる。晝やかましく鳴いてゐる雞も、もう寢てゐるだらう「ゴーンゴーンゴーン」と城山の鐘だ。周圍の空氣をふるはして異樣にひびいた「モウ止メヨウ」ひとりごとを言ひながら僕はベンをおいて雨戸をあけた。つめたい風がほほをかする。全世界を輝すかのやうにきら〳〵多く

LODGING AT ZEZE

5. 2. S. Hayashi.

July 29th, 1932.

Our crew started from Hikone at 5 a. m. by our boat, the Nagara, and after 12 hours' long rowing we arrived at Zeze at 5 p. m. and entered our lodging house which was at Nakaote-cho. We arrived all tired out from the hard rowing, and we wanted to go to bad as soon as possible. But we had to take supper, and we went to a dining house, which was in front of the Kinpa-ro. We took our supper as voraciously as so many hungry wolves. I ate up 7 cups of rice, and Yasuda did 8. After supper, we went to a bath-house near the *Zeze* prison. The bath-house was very large and comfortable. We went to bed at 9. There was no mosquito, perhaps on account of the good sanitaion of the place.

July 30th. very fine.

At 9 we went to the port for training. To our great surprise, there was a dead cat in our boat. It was the cat that we saved the day before from the water, and lost sight of it in the boat as she hid herself somewhere. We buried her carefully in the sand near a stone wall. Having done the burial, we rowed our boat very hard till we could see the long lake line. 3 hours later, we came back again to the port, and we went to our lodging house. As the house was too small for us to lodge at, we removed to another lodging. This house was at Nishiki-cho. There were many children, boys and girls, in our neighbour-hood, and they were so kind to us that we loved them very much. We were all in good humour.

July. 31st.

We got up at 6 in the morning, and had the training with "backing seat" before breakfast. Mr. Yagi, Mr. Nakai and other boys and girls, who lived near us, gathered at the door, and were looking our training intently. When it was finished they said, "Good morning, our dear brothers." And we answered, "Good morning, our dear little brothers." I had never been addressed as "elder brother", for I am the youngest in our family, so I was very interested in their greetings, and I thought if I had any younger brother or sister, I would love them tenderly. At 9, we went out to

Ishibaga-hama, and rowed the course. It was l, 100 meters. The record was 4' 54", and not a very bad one indeed. Hundreds of "spies" were there on the bank, with their field-glasses and stop-watches in their hands. Mr. Omura was our spy and was among them. At noon, we went back to our lodging house, and found Mr. Matsumoto who had been ill in bed at home.

Aug. 1st.

There was nothing particular to note.

Aug. 2nd.

At 10 a. m., we went boating to the Seta. The long rows of house-boats were seen on the river, but they were drawn up at the side of the river. The boats were netting or gathering corbiculas. The corbicula is a noted product of the Seta. When we arrived under the iron bridge, we recalled to our minds the regatta of last spring, held under the auspices of the Third High School, because this place was the starting point of that race. At noon, we went back to our lodging house.

Aug. 3rd.

When we went back to our lodging at 11 a. m., after 3 hours' training, we met Mr. Kitagawa and Mr. Kato who had called on us on the way of their camping. We were very glad, and we treated them with tomatoes and barley tea. They thanked us very much for our entertainments, and after l hour's stay they left us.

Aug. 4th.

At 10 a. m., Letters came from our homes and friends. One of them was addressed to Mr. Nishida from his sister. She said in her letter, "My dear elder brother, how do you do now? To-day, Mr. Nishida, a representative of ours in Los Angeles, gained the victory in pole-vault game at the Olympic Meet. This clearly shows that you (also Nishida) will surely win a success at the coming race. Please do your best and gain the victory. Your loving sister Y. Nishida," Encouraged by her letter, we trained harder than before. At noon, Mr. Watanabe came to our lodging house. He brought us 10 pounds of beef from Hikone. We ate it up at supper. The party was only 12 boys, and the beef was 10 pounds. The share was indeed 1 pound a boy. It was too much for us, and some could not even stand up by overeating. We talked on our appetite each other; .....

The day of the boat-race is drawirng near; our fighting spirit is rising higher and higher; the time-record of our rowing is getting better and better; and we are all looking forward to the race.

The Fnd.

詩

大和田清朗未定稿

祭　花澤航空少佐之靈

少佐令兄治策氏現與予連卓
奉職干當校以故有感更深者
謹賦云

鳥器翔空潰賊叢　東西誰不仰雄風
英魂毅魄豈空死　永作神明護滿蒙

遊醒井村丹生

坂田郡醒井邑古來以日本武尊
著東南有一峽稱宗谷溪水潔四
時不減水量兩岸怪石奇巖突兀
峙天松杉繁茂其間盛夏尙足忘
暑我縣利用之投資十萬養飼于
鱒魚於此水源數里之間大者迢
尺潑剌跳急湍實天下之奇觀也更
廻谷涉谿至水源忽焉有驚目者
此即縣經營之養魚場也設計雄
大建構完整宛然山中蜃氣樓也
初夏一日與友人四五伴兒童遊
于玆殆忘日之傾賦一首爲記念
云

欲究醒南峽谷幽　兒童相伴步悠々
岫雲生畔老樵息　山雨霽澐新綠稠
怪石摩天青壁峙　奇巖激水翠屏抽
苔蹊盡處革風物　畫出溪間蜃氣樓

偶成

三孫侍膝每忘憂　潑剌天眞心事悠
携手時遊郊外野　二兒相角一兒謳

拜叙勳恐懷謹賦

碌々奉公三十年　無爲老大顧蕭然
聖恩優渥恍如夢　何以微臣酬滴涓

昭和七年秋行滋賀縣出身滿蒙戰沒
勇士慰靈祭於彦根招魂社併而開催
其遺留品展覽會參拜者如堵詣者無
不潤巾感慨賦一絕

聽極壯雄者極酸　血痕猶昨帶微瀾

欽差厚幣安神意　嗚呼忠君一片丹

晩秋小咏

十萬皇軍赴國難　家々燈暗虫韻酸
閨人未睡爲何事　彤管裁書淚不乾

旅愁

羽根田辰男

廣漠の海
水平線を取卷く薔薇雲
波頭の彼方に沒せんとする夕陽
弱い餘映にきらめく波
　タンタン……
唯一の賴り、スクリューの響
デツキに紫濃く付けられた私の長い影
旅愁を感じる。

一つ星

森の木綠消ゆきて
夕の色の流る頃
×
セピアの空に唯一つ
淡き光の一つ星
×
沼面の蒼の消ゆきて
夕の色のおほふ頃
×
セピアの沼に唯一つ
淡き光の一つ星

色電氣

雨にしつぽり濡れた舗石に
色電氣が
赤に——
綠に——
滴り落ちてゐた

早春

馬場弘一

風そよ吹く金龜の春あはし、
梢はそよぐ今もなほ、
あはれに鳴きつ飛び交ふ鳶。

空にそびゆる金龜の御城、
姿嚴し誰や知る、
古き歴史のこの城を。

靜かに獨り停みて、
深き思ひにとざされぬ、
折しも響く鐘の音は
遠き昔を物語る。

一九三二、三、七作

東亞の迷雲を掃いて

淺井晃

見よや東亞の空、迷雲低々として日陽隱る。
赤露の怒氣を含みて吹くや興安嶺の風
碧眼の嫉妬にさかまくか太平洋の波
哀れ四億の民の末路やかなし。

見よや地平線の彼方に朝日はさし出づ
密雲を貫く所正義を照らし
正義の輝く所平和の波は理想の岸へ
いざ朗らかに歌はんかな勝鬨の聲。

思は深し滿洲や

種村貞一

風颯々と高粱の

青葉の波のさわぐ時
顧すればその昔
日露の役や日清に
大和男子の鮮血は
極東の汚垢を洗ひけり
思は深し滿洲や

風颯々と高粱の
青葉の波のさわぐ時
顧すれば一星霜
滿鐵破壞の爆音に
干戈再び交へけり
正義の刄ひらめけり
思は深し柳條溝

風颯々と高粱の
青葉の波のさわぐ時
忠勇無雙の我兵は
御國の爲に報ぜんと
猛虎の如く立ちにけり

連戰連勝おさめけり
思は深し忠勇士

風颯々と高粱の
青葉の波のさわぐ時
一星霜は夢の間や
今なほ砲煙鎭まらず
然れど正義の其下に
靡かぬ草やあらずかし
思は深し硝煙や

風颯々と高粱の
青葉の波のさわぐ時
鄕等の苦心實を結び
滿洲國の花はさき
黎明迫る大亞細亞
日本帝國萬萬歲!!
思は深し九月十八日

除夜の鐘

杉山十三雄

寒月黒く星もなく
更けゆく夜の靜寂に
時は流るゝ水の音
生なきものゝ叫ゆる聲よ
除夜の鐘の音漂ひつ——

榮華はすべて過ぎし日の
淡き水泡と消えはてぬ
我を弔ふ百八つの
何處に鳴るや悲しみを
秘めし音色の除夜の鐘

されど黄金の扉を開き
希望に滿てる迎春の
輝く幸福の歌調
平和の鄕の前奏譜
奏づる者よ除夜の鐘

忘れじ、かの頃搖籃に
無心に眠りし夢いづこ
古きものみな新しく
はや逝きにしや一年の
護送の曲の鐘の音よ……。

日本の兵隊（童謠）

寺田太治郎

日本の兵隊○聯隊
滿洲の野原に、野原に
守りなさるよ
背嚢せおつて銃劍持つて
守るよ守るよ
皆んなの兵隊ザクザクザクと

夜のとばりに草の床
月の光に、光に
休みなさるよ

背嚢枕に夜露に濡れて
休むよ休むよ
皆んなの兵隊スヤスヤスヤと

百日草

百日草の咲く頃は
　毎日お日でり暑いころ
　　だれもうれしい夏休み
百日草の咲く畑に
　いつも舞ひます白い蝶
　　毎日お日でり暑いころ

露

大きな大きないもの葉
　小さな小さな露の玉が
　　端から端へコーロコロ
長い長いささの葉に
　小さい小さい露の玉が
　　先から先へコーロコロ

輕業お日様

望月實

一

水平線を綱渡りする、お日様。
金波のまたゝきを、　よそに、
ポツクリ。　夜明けです。

二

くる。くる。くる。輕業のうまさ、
銀波の拍手をよそに、
ニツコリ。　おひるです。

三

かば色のとばりに、片頰かくした、
さゝら女波の樂隊をよそに、
さよなら。　日ぐれです。

朝霧と花屋

佐藤　正

朝霧や花屋のドアはあけてあり
朝霧や花屋の窓のあかき花
朝霧の辻にかくれぬ花車
花賣の聲とほりゆく霧の中
辻に賣る花束霧にぬれて居る

月

西村英男

名月や月待つ人の影長く
虫の音も早や消え去りぬ宵の月
淋しく昇る松の間より

秋

秋日和今日は何處へと一思案
黄金の波うつ中に紅の
夕日を受けてかがし笑ひぬ

運動會

運動會杉原先生勇ましく
モーションかけて走り給ひぬ

除夜の鐘

中島午郎

うか〳〵と年とる人や除夜の鐘

元旦

元旦や鶯の聲ほがらかに

臺灣行

藤田一一

赤い燈臺の下、太洋の波の收まる所、船は勇躍して港に入るブリッヂを一歩一歩ふみしめながら埠頭に降りた瞬間の喜悅はげた紺の支那服を着て街道の傍にしやがんでゐる人間のあの目肅々と降りしきる雨を眺めながら異國に來た第一日のいたましい印象を感ずる雨に濡れてつややかにエメラルドを研ぎ出してゐる山々の草と樹木見渡す限り緑に蔽はれた大平原の雨の中を增水した濁流の大河がむくむくと泥水の中から体を起して働かうとしてゐる水牛のちかしい心男性的な植物がむつくりと巨大な姿を見せてゐる亞熱帶公園みづみづしく成長した青葉がどつしりと土に日蔭を印してゐるカンバスにサフブグリーンをぬつてエメラルドを重ねて朱を置いた風景感覺的な色彩と表現的な形態とが荒い筆で描かれて調和した風景汚れ切つた家ばかりが並んで人々は半分眠りこけてゐる市街の廣がり煉瓦の塀にとまつてゐる蜥が平氣で頭からかんかん日に照らされてゐる

市街のいらかが透明な紅玉のやうにきら〳〵と輝いてゐる夕暮の展望降り出した雨が車窓に美しいビードロの簾を下す朝のドライブ朱のやうに眞赤な道が傾斜して遠く熱帶山脈が霞んでゐる熱國の眞紅な花だから今こそ心の髓までしみ通る血ではないか坦々として平原の數十哩が延びて車窓に熱帶の眞青な空が反影するウルトラマリーンの海の青さは南支那海の渺茫たる水の廣がり連なる山脈の高山（タカヤマ）の峰々にスコルを含んだ濁雲がじつと固まる旅裝を解く朝の熱國の何とも云はれぬそのすがすがしい陽（ヒ）の光り並木の廣道（ヒロミチ）にきしきしと音を立てて車のわだちがきしんで後退した感情遠い果ての國へ來た氣持が迫つて來て支那人ばかりの街のほこりがもうもう孔子廟の赤い煉瓦塀に廣葉の木立が繁りに繁つてひつそりとした眞晝だ支那城門が遠くに見えて目の前には巨大な老樹がつゝ立つてゐる繪畫趣味淋しい營みにすたれゆく都、支那人のあくどい体息に醉はされる寺院の石段にねころんで退屈し切つた哀れな人種のよごれた肉体と大蟒彩色と彫刻とに濃厚な藝術味を見せて支那寺院の莊麗な夕暮である

初夏

紅椿が音もなく地上に落ちた、そして春も北の國へ逃げて行つた

丹田慶三

ボートレースに負けたが、天を仰いだ時、初夏の太陽は我等の努力を嘲らつてくれた虻が障子にぶつつかつて飛んで行つた、初夏の眞晝のひそけさ！初夏だ！コバルトの魅力ある空は私にキヤムプのプランを立てさせる

盛夏

水銀は昇る〳〵。そして神經は鈍くなる。殺人的酷暑！夏の日の正午！頭からおしつけられる人間は短かくなる影暑い夏を一層暑くする。百日紅の花と群蜂の唸りとが

丹田慶三

キヤンピング

砂ぼこりと汗と空腹の三重奏暑い正午前の強行軍だ眼下に展がる青田、新鮮な空氣、高山をふんまへて私は朗らかだ！國境に立つた私は今迄の苦痛を忘れた。そよ風に吹かれて汗のシヤツを着更へた時！ふと寒さに目がさめた晝の暑さは忘れたかのやうそして寢衣の襟をかき合はせた私暑苦しいテントを開けた時、流星が四つ、何か不吉な豫感に襲はれる波の音と艫の音と村の若者の吹く尺八、夜の敦賀濱は靜かだ。